

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

講演やテレビ番組の出演は勉強になるが、実のところ苦手意識の克服に何年もかかった。

出演は変身である。本来の自分ではない、別の何かに変貌することになる。

執筆とかけ離れたその仕事には、しばしば心が①ものだ。だがあるとき自然体でいられるようになったきっかけが、「眉毛の話」だった。

とある席で、

「メイクで眉まで描かれました。なんだか自分じゃなくなるみたいですよ」

そんなふうには私が出演仕事についてばやいたところ、にわかには担当の女性編集者が、

「何を言うんですか。眉毛は国の違いを乗り越えるんです」

などと力説したのである。

「国？」

② その突拍子のなさについて引き込まれた。

「そうです」

彼女は自信満々に言う。そして、彼女がアメリカのオハイオ州で経験したことを話してくれたのだった。

「子供の頃からの夢で、大学生のとき一年だけ留学したんです」

彼女はある工業都市で生まれ育った。

子供たちの親はほぼ全員、同じグループ会社に勤めていた。道行く人誰もが顔見知りだ。そういう場所の温かさに感謝する一方で、いつしか、自分一人だけで生きることへの欲求が芽生えていった。

誰も自分を知らない場所に行く。自分というものを試す。

それが、「海外留学」だった。

両親は猛反対。特に海外経験がない母と大喧嘩になった。

③ 「万一のことがあっても外国になんて行けないと母は言うんです。たとえ私が死んでも遺体を引き取りに行けないと。私は、遺体を搬送してくれるサービスもあることを調べて教えたんですが、逆効果でした」

いかにも反抗期という感じの態度である。とにかく彼女も諦めない。両親に学費を頼らず、交換留学の枠に入るため、猛勉強した。

ついに面接にこぎ着け、念願の夢がかなはずだったが、結果は、

「面接で落とされたんです」

であった。

ずっと夢見ていたのに道が消えた。人生最初の挫折であり、とても現実と思えなかった。

母に電話し、

「落ちちゃった」

と告げた瞬間、とつと涙が出た。

すると、電話越しに娘の泣き声を聞いていた母が、唐突に言った。

⑤

⑥ 猛反対していた母が、ここに来て逆に自分の背中を押してくれた。自分の夢をわかってくれた。それですすまず泣いてしまった。

かくして彼女はアメリカに渡った。

母は心労で痩せこけ、娘は元氣潑刺で過ごした。

で、「眉毛」である。

彼女が大学で参加した実習の一つが老人ホームでのボランティアだった。

何しろ一族全員、近所にいる環境で育ったのだ。祖父母をはじめ、老人の扱いは慣れていて。そう思っていたが、これが彼女の二度目の挫折となった。

「お前の眉は偽物だ」

というのが、彼女が担当したマデリンお婆ちゃんの最初の一言だ。

病気の治療のせいで眉も髪も抜け落ちたそのお婆ちゃんは、端的に言って、口が悪かった。もしこれが聞き慣れた日本語だったら、

「とても耐えられなかったです」

というほどのスラングの嵐が、次々に浴びせかけられた。

しかもこのお婆ちゃん、彼女の悪口を大学の担当教官にまで吹き込む。優しくしたいだけなのに、強烈な悪意が返ってくる。

アメリカ人の自己主張の強さと、その裏にある「孤独」を理解するには、彼女は若すぎた。ひたすら嫌われているのだと思い、ボランティアを途中で諦めて単位を放棄しようと思つた。

だが母が背中を押してくれた留学である。諦めてはいけない。あの最低なクソババアであるマデリンお婆ちゃんにも一矢報いたい。

そこで、ふと思いついた。お婆ちゃんの口癖は、

「お前の眉は偽物だ」

であった。

「私にはわかる。お前の顔は偽物だ。髪も目も唇も鼻も、お前の汚い顔を隠すための小細工だ」とつながり、悪罵のフルコースに発展する。

「よし、眉毛だ」

理屈を通り越してそう確信した。

彼女はルームメイトから化粧道具を借り、マデリンお婆ちゃんと対決した。

「私が本物の眉毛を見せてあげる」

そう告げるや、何度も練習した「眉毛」を、体毛が抜け落ちた相手の目の上に描き込んでやったのだ。

お婆ちゃんはびたりと黙った。

彼女の作業中、驚いたように目をきよきよさささせていたが、拒みはしなかった。

ほどなくして眉が完成した。お婆ちゃんは鏡を見て、言った。

注2 スラング、改まった場では使えないような品のない言葉。俗語。

注3 悪罵、ひどい悪口を言うこと。

注1 グループ会社、親会社を中心として、協力し合う会社。

注2 スラング、改まった場では使えないような品のない言葉。俗語。

注3 悪罵、ひどい悪口を言うこと。

注1 グループ会社、親会社を中心として、協力し合う会社。

注2 スラング、改まった場では使えないような品のない言葉。俗語。

注3 悪罵、ひどい悪口を言うこと。

注1 グループ会社、親会社を中心として、協力し合う会社。

注2 スラング、改まった場では使えないような品のない言葉。俗語。

⑦ だがお婆ちゃんの悪罵を十五分近くも停止させた彼女は、十分に一矢報いたと信じ、会うたびに眉毛を描き込んでやった。

やがて実習期間が終わり、学友たちは担当教官を通して、担当した老人たちから御礼の手紙を受け取った。マデリンお婆ちゃんだけ何も送って来なかった。

それで良かった。どうせ悪口だらけの手紙など金輪際読みたくない。留学期限が来て、彼女は帰国した。

「たった一年で学べることなどたかが知れている」というのが留学の感想だった。

だが短い期間であっても、得るものがあることを、しばらくして送られてきた一通の手紙が教えてくれた。

手紙は、ボランティア実習で通った老人ホームからのものだった。中には、ホームの職員が書いた手紙と、一枚の絵が入っていた。お婆ちゃんと女の子が、にこにこ笑って手をつないでいる絵だ。二人とも、滑稽なほど「くつきり」とした眉毛が描かれていた。

職員の手紙で、彼女は、マデリンお婆ちゃんが読み書きのできない人であったことを知った。手紙を書きたくても書けなかった。だから絵を描いた。

でも送り先の宛名が書けない。そうこうするうち彼女は帰国してしまった。その後、お婆ちゃんの病が深刻化した際、職員が絵を見つけた。

「マデリンの眉を描いていた、あのボランティアの子だ」職員はすぐに悟って、大学に問い合わせ、彼女に送ってくれたというわけだった。

そのときにはお婆ちゃんは世を去っていた。彼女は訃報と絵を抱きしめて泣いた。そしてこの経験が、本当の教訓となった。言葉や習慣の違いを超えて、短い時間であっても、人は通じ合うことができる。お互いの善意を伝え合うことができるのだ、と。

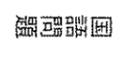
⑧ は、世界中の人間にありますからね」彼女は言い、そしてこう付け加えた。

「出演仕事の装いって、わかりやすいじゃないですか。多くの人とわかり合うための、きっかけ作りだと思っんです」

この言葉には、思わず、じんときた。以来、出演仕事を苦にすることがほとんどなくなった。海の彼方で眠る、見知らぬマデリンお婆ちゃんに、感謝である。

(沖方丁『もらい泣き』による)

注4 訃報、死亡したという知らせ。



問一 ① に入れるのにもっとも適切な言葉を次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 解き放たれた
- 2 躍り上がった
- 3 姿勢を正した
- 4 悲鳴を上げた

問二 線部②「その突拍子のなさについて引き込まれた」とありますが、これはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 自分の考えとはあまりに違う話だったので、反感をおぼえてしまったということ。
- 2 女性編集者の言葉が調子外れだったので、どうにも無視できなかったということ。
- 3 意外な人物が力強く考えを述べはじめたので、思わず聞き耳を立てたということ。
- 4 予想もつかない意外な話の展開だったので、逆に強く興味をひかれたということ。

問三 線部③「私は、遺体を搬送してくれるサービスもあることを調べて教えたんですが、逆効果でした」とありますが、なぜ「逆効果」だったのですか。その理由としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 親が認めてくれなくても、自分で何とかするというような生意気な態度をみせたから。
- 2 皆が顔見知りであるような地元の人々の温かさを、否定するような内容だったから。
- 3 母親が心配して言った言葉を表面的に聞いて、感情を逆なでするような話をしたから。
- 4 母親が外国に行ったことがないということ、わざと見下したように説明したから。

問四 線部④「どっと涙が出た」、線部⑥「ますます泣いてしまった」とありますが、この「泣いた」気持ちとはどのようなものだったのでしょうか。その説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 母に報告した時、ようやく試験の緊張がとけて自然に涙が流れ出たが、母が自分の努力を認めしてくれたのだとわかってうれしくなり、いっそう泣いてしまったということ。
- 2 母に報告した時、もうどうなってもいいと投げやりな気持ちになって涙も流したが、母に慰められてその愛情に救われた思いがしてうれしく、いっそう泣いてしまったということ。
- 3 母に報告した時、自分が試験に落ちたことを初めて実感して悲しくなって泣いたが、母が自分の考えを理解してくれたことがうれしくて、いっそう泣いてしまったということ。
- 4 母に報告した時、自分の負けを自覚して悔しくなり泣いたが、母が同情してくれたせいでますます自分の幼さがわかりそれが情けなくて、いっそう泣いてしまったということ。

問五 ⑤ に入れるのにもっとも適切な言葉を次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 自費で行くほうでいいじゃない
- 2 来年もう一度挑戦すればいいじゃない
- 3 頑張ったんだからそれでいいじゃない
- 4 もう反対しないから好きにすればいいじゃない

問六 ⑦ に入れるのにもっとも適切な言葉を次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 ありがとう
- 2 下手くそ
- 3 まあそっくりね
- 4 あら驚いた

問七 ⑧ に入れるのにもっとも適切な漢字二字の言葉を本文から探し、抜き出して答えなさい。

問八 テレビ出演の仕事についての筆者の考え方はどのように変わったでしょうか。次の説明文の中のア、イ に入れるのに適切な部分を、アは十五字、イは二十一字で本文から探し、抜き出して答えなさい（句読点、記号を含みます）。

筆者は最初、テレビ出演の際のメイクを、ア でいやだと思っていたが、担当の女性編集者の話を聞いて、イ と考えるようになったということ。

問九 マデリンお婆ちゃんは、大学生だった女性編集者につらく当たっていますが、この時のお婆ちゃんの心情の働きを筆者はどのように説明していますか。次の説明文の中の に入れるのに適切な二十五字の部分を本文から探し、抜き出して答えなさい（句読点、記号を含みます）。

筆者はマデリンお婆ちゃんの言葉を、 の表れだともみている。

二 次の方文を讀んで、後の問いに答えなさい。ただし問いの都合で、本文を一部改めたところがあります。

かつてであれば、悩みのタネを解消するのは呪術や宗教の役割でした。哲学にもそれが期待されていたかもしれませんが。しかし、現代でそれらに匹敵する役割を期待されているのは、科学です。少なくとも、私たちは、科学によって幸福の障害になるものが確実に少しずつ取り除かれていくに違いないと期待してきました。

この意味で東日本大震災と福島原発事故は大きな意味をもつ出来事だったといえます。なぜなら、私たちの「①」が大きく揺らいだからです。

たしかに震災で、いろいろなものが失われました。家族、友だち、家、思い出、花壇、未来、会社、心、貯金、家畜、お客さん、田畑、気力、愛犬、希望……人の数だけ、失われたものはさまざまでしょう。しかし、死者や行方不明者の「生命」を別にすれば、「①」が失われつつあることが、最も大きな喪失感の核となっていないでしょうか。

私たちは、何よりも原発事故を通じて、メディアから発せられる科学の言葉と、われわれの日常感覚の乖離に悩まされました。あの恐ろしい事故のあと、ほとんど馴染みのないシーベルトとベクレルという単位がメディアを駆けめぐりました。そして小学生の子供が理科の授業でも受けるように、人間が一年に自然に浴びる放射線量はいくらであり、一回のレントゲン撮影で受ける線量はいくらであり、長期にわたって被曝しなければ、健康への影響はほとんどないといった説明を繰り返し聞かされました。

たしかにそれは何か単純明快で、疑問の余地のないようにも思えるのですが、そう聞いて、「③」と安心した人は、この日本に何人いたでしょうか。

デジタル時計のように放射線のレベルを正確に示しているその数値と、ナマの生きものとして私たちが感じる不安や恐怖の落差、あるいは隔絶感。この経験は、スリーマイルやチェルノブイリの先例があるとはいえ、規模と甚大さの点でおそらく未曾有のものでした。

悲しいことに、このような恐ろしい出来事が起きなければ、私たちは科学の言語がこれほどわれわれの身体感覚からかけ離れたものになっていったことに、永遠に気づかず終わっていたのかもしれない。

では、なぜ、科学との隔絶感が、われわれをかくも絶望させるのでしょうか。

それは、科学と呼ばれるものが、いつの間にか、私たちにとって疑似宗教的なものになってきたからです。といても、仏教やキリスト教のような具体的な信仰のことではありません。「よりどころ」とか、「心のやすが」とかいったものです。そのような位置に、いつのころからか科学が大きく陣取っていったのです。それへの信頼が失われたため、私たちは足もとの床が抜けたような不安に駆られることになったのです。

たとえていえば、自分に活力を与えてくれる栄養だと思つて毎日食べていたものが、実は身体を害する毒だったのかもしれない、いや毒に違いないと思うようになったようなものです。この先何を食べて

注1 呪術：自然には起こらない現象を引き起こす術。まじない。

注2 科学の言葉：科学の世界で使われる専門的な言葉。

注3 乖離：遠く離れていること。

いかわからなくなつたのですから、「裏切られた」という感覚は大きいわけです。

すでにウィリアム・ジェイムズは、一九世紀末、「多くの人々にあつては、『科学』はまぎれもなく宗教の位置を占めつつある」と指摘し、そのような場においては、『自然』の法則が、『崇拜されるべき』ものとなつてゐる（『宗教的経験の諸相』）と述べています。つまり、科学が神のような存在になつてゐるということです。

先見の明のある謂だつたこの言葉は、その数十年後には当たり前のこととなり、一〇〇年後のわれわれには、もはや意識せざる日常の前提となつていました。しかし、原発の事故によって、それが一気に覆されてしまつたのです。

多少大げさにいえば、これは信仰によつて生きていた中世の人びとが、その信仰をまるごと否定されたのと同じです。そう考えれば、われわれが虚無感に陥る理由がわかるのではないのでしょうか。「信頼」というものは、いったん崩れてしまつたら、よほどのことがない限り、取りもどせないのです。

科学への信頼が失せたことで、私たちに未来が明るく輝くようには見えなくなりつつあります。科学への信頼がなくなつても、未来への希望はなくなるはずなのに、そんな重たい空気が社会に立ち籠めていきます。そのくらい、私たちにとつて科学というものが、限りなく宗教に近いものになつていたということなのです。

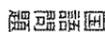
これにくらべれば、敗戦を知らされた一九四五年の八月一日でさえ、国民の多くは、それほどの虚無には陥らなかつたのではないのでしょうか。

それはなぜかといへば、このときはまだ未来を信じてゐることができたからです。がんばれば、また未来は開けるに違いないと信じてゐることができたからです。そして、実際、戦後の日本はがむしやりに復興に向けて進み、経済大国として蘇りました。

しかし、現在の私たちが、いつたい何に向けてがんばらばいいのでしょうか。被災地の復旧や復興が当面の目標になることはよくわかります。またその前に被災者の心のケアや生活の再建も当然必要です。しかし、この先の社会に対する希望のようなものを明確に描けるでしょうか。この意味で、いま、<sup>⑥</sup> 私たちの心をじわじわと圧迫している病のようなものは、七〇年前よりむしろ深刻なのかもしれません。

そう思うと、『吾輩は猫である』のある場面が意味深長に思えてきます。苦沙弥先生の仲間である迷亭君の、「江戸時代の遺物」のような頑固者の伯父が、時代のなかに寄せてきた新しい学問の波——すなわち科学——を評してこう言うのです。

凡て今の世の学問は皆形而下の学で一寸結構な様だが、いざとなつては立ちまかせんてな。昔はそれと違つて侍は皆命懸けの商買だから、いざと云う時に狼狽せぬ様に心の修業を致したもので、御承知でもあつしやろうが中々玉を磨つたり針金を縛つたりする様な容易いものではなかつたのでがすよ。



「玉を磨つたり針金を縛つたり」というのは、彼らの仲間の一人である寒月君（物理学者の寺田寅彦がモデル）の実験のことで、伯父さんに言わせれば、物理などはままた遊びのような気楽なもので、それにくらべれば、旧時代の侍はみな命がけの真剣勝負をしてゐたということなのです。<sup>⑦</sup> さしもの物理学者もかたなしです。

先にも言いましたが、漱石が生きたこの時代は、科学がそれまでにない勢いで世界を覆いはじめた時期です。大方の人は驚き、喜び、魅了され、その利便性を盲目的に享受することになるわけですが、識見ある人びとは、それは明るい未来を作るものではなく、人類を不幸のほうに引張つていくのではないかと疑つていました。

ヨーロッパでは、第一次世界大戦のうちに、そのような言説が目立つようになります。なぜかという<sup>⑧</sup> と、その大戦が科学と先端技術を駆使して行われた情け容赦のない大殺戮戦だつたからです。

あのポール・ヴァレリーも、われわれにとっては食べなれた黒パンのような科学と技術が未曾有の殺戮をもたらしたと、『精神の危機』のなかに書き記しました。ウエーバーやジェイムズも、科学はダメかもしれないと懐疑の目を向けました。

ウエーバーは、大戦のうちに出版した『職業としての学問』のなかで、次のように述べています。

天文学なり、生物学なり、物理学なり、化学なりの認識によつて、世界の意味といったものが教えられるなどと信じてゐるものが、今日でもまだいるだろうか。（……）もし科学の認識に何かおさわしいことがあるとすれば、それは、世界の「意味」といったものが存在するという信仰をば根だやすとすることである！ いわんや、学問が「神への」道だなどという考えのときははもつてのほかのことである。

ウエーバーの『職業としての学問』は、ある意味においては『吾輩は猫である』とよく似ていて、<sup>⑧</sup> 当時最高とされた西洋の学問についての考えを述べたものといえますが、彼らはほぼ同じ時期に、科学というものの役割を認めながらも、それによつて地球上の人類が非常に深刻な事態に巻き込まれはじめたと危惧したのである。

いまから一〇〇年前の漱石やウエーバーやジェイムズたち——、当時、最高の知性であつた彼らがこの世に対して発した言葉を讀み、そこにこめられたものを見つめてみると、私はあらためて胸打たれます。彼らはなぜこれほどまでに人には見えないものを見ることができ、未来に対する箴言のような言葉を発することができるのだろうか、と。ですから、<sup>⑨</sup> 彼らの言葉をもう一度心に刻みたいと思ふのです。

注6 識見、物事を正しく判断する力。

注7 第一次世界大戦、一九一四年から一九一八年にかけて、ほとんどのヨーロッパの国々が巻き込まれた大規模な戦争。

注8 言説、意見。

注9 大殺戮戦、大規模に多くの人を殺す戦争。

注10 ポール・ヴァレリー、一八七二—一九四五、フランスの詩人・思想家・評論家。

注11 ウエーバー、一八六四—一九二〇、ドイツの社会学者。

注12 箴言、教訓となる短い言葉。

考えてみれば、人類の未来、世界の行方などというものは、そもそも彼らの個人的な幸せとは関係ありません。そんなことは心配せずに、自分だけの人生に満足して生きていたつていいのです。にもかかわらず、彼らは渾身の力を振り絞って、精神に破綻をきたすぎりぎりのところまで考え抜きました。その並はずれた熱情はどこからくるのでしょうか。

その理由を考えるときに、私の頭をしきりによぎるのは「二度生まれ」(twice born トウワイズ・ボーン)という言葉です。「二度生まれ」は、ジェイムズが『宗教的経験の諸相』のなかで重要な言葉として使っています。

平たく言うと、人は生死の境をさまようほど心を病み抜いたときに、はじめてそれを突き抜けた境涯に達し、世界の新しい価値とか、それまでとは異なる人生の意味といったものをつかむことができるというのです。

彼は「健全な心」で普通に生を終える「一度生まれ」(once born ワンス・ボーン)よりも、「病める魂」で二度目の生を生き直す「二度生まれ」の人生のほうが尊いと言いました。

実際、ジェイムズ自身、一時重篤な神経の病に悩まされたことがあり、そこから立ち直った二度生まれの人なのです。『宗教的経験の諸相』のなかには、狂気すれすれの患者の例として、彼自身のことを取りあげられています。

漱石やウェーバーもまた、まさに二度生まれの人びとです。

漱石の場合は、自分には手本にすべきモデルはない、自分は前人未到の地平を切り開いてやるという意気込みで文学の道を進んだわけですが、その結果、神経衰弱になり、胃潰瘍にもなります。明治四三年(一九一〇)、『門』の連載終了直後に胃潰瘍が悪化し、ついには療養先の旅館で、洗面器いっぱいほど血を吐いて生死の境をさまようことになったのです。「修善寺の大患」と呼ばれる、人生最大の危機でした。

ウェーバーも、過敏な神経とありあまる知性と家庭的な確執が原因となって、心を病み、一時精神病院に入りました。彼の場合は、ブルジョア的な俗物である父親と敬虔なクリスチャンである母親の間にはさまれて、精神的に引き裂かれるところがあつたようです。冷たい手で心臓をつかまれて、底なしの沼に引きずり込まれるような日々だったのではないのでしょうか。

ですから、多少、牽強付会のようなようですが、そのような漱石やウェーバーやジェイムズの生き方にあやかる意味でも、私はあの三月十一日の経験を、どうしても「二度生まれ」の機会にしなければならぬと思うのです。

というのも、漱石たちが悩み抜いていた時代から一〇〇年たちますが、われわれはその間ずっと反省のない「一度生まれ」でやってきたと思うからです。

何度もつまづきながら、私たちは一度も徹底して後ろを振り返ることなく、やり直すことも考えず、立ち止まることすらなく、ただ「失敗を忘却する」という方法のみで、今日までやってきたように思う

注13 「門」の連載、漱石は朝日新聞に小説の多くを連載していた。

注14 修善寺、伊豆にある保養地。

注15 確執、考え方が違うためにおこる争い。

注16 牽強付会、都合のいいように、無理に話をこじつけること。

からです。

一部のメディアやマスコミの動向などを見ると、忘れることの得意なこの国の人たちは、早々と「3・11」を忘れようとしている模様です。過去にとらわれるより、大切なのは未来だ——とかいう、いつもの言説とともに。またしても「一度生まれ」ですまそうとしているのです。その背後にある問題の根の深さにも気づいていないように思えてなりません。

私たちは、いまこそ「二度生まれ」の人の言葉をよくよくかみしめるべきではないのでしょうか。

(姜尚中『続悩む力』による)

問一 ① (二箇所あります)には同じ言葉が入ります。入れるのにもっとも適切な言葉を本文から探し、六字で抜き出して答えなさい(句読点、記号を含みます)。

問二 ——線部②「人の数だけ、失われたものはさまざまでしょう」とありますが、これはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 失ったものの中で人の数ほど多いものはないということ。
- 2 人はみなそれぞれに失ったものがあるということ。
- 3 失ったものの数から失った人の数がわかるということ。
- 4 人だけが生活に関わるあらゆるものを失ったということ。

問三 ③ に入れるのにもっとも適切な言葉を次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 そうですか、それはよかったです
- 2 よくわからないけど、まあいいんじゃない
- 3 うん、やはり専門家の話はわかりやすい
- 4 やれやれ、もう説明は十分だ

問四 ——線部④「悲しいこと」とありますが、これは、その文の中のくくくく線部ア、エのどこにかかっていますか。もっとも適切なものを一つ選び、その記号で答えなさい。

- ア 恐ろしい
- イ 起きなければ
- ウ かけ離れたものになっていた
- エ 永遠に気づかずに終わっていた

問五 — 線部⑤「足もとの床が抜けたような不安」とありますが、これはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 科学が私たちの役に立つ時代はすでに終わったと思うこと。
- 2 科学が宗教の役割をしようと考えたのは間違いだったと思うこと。
- 3 科学が私たちに与えてきたものは誤りであったと思うこと。
- 4 科学が親しみをおぼえるほど身近なものではなくなったと思うこと。

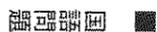
問六 — 線部⑥「いま、私たちの心をじわじわと圧迫している病のようなもの」とありますが、それは私たちがどのようなやり方をしてきた結果だと筆者は考えていますか。その説明としてもっとも適切な一つの文をここより後の部分から探し、その最初の五字を抜き出して答えなさい（句読点、記号を含みます）。

問七 — 線部⑦「さしもの物理学者もかたなしです」とありますが、これはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 楽しそうな物理学者の仕事も実は容易なものではないということ。
- 2 流行にのっていい気になって物理学者もやがて行きづまるということ。
- 3 立派な研究をしている物理学者もまったく体面が立たないということ。
- 4 一見面白そうな物理学者の話もすぐに嘘だと皆が気づくということ。

問八 — 線部⑧「当時最高とされた西洋の学問についての考え」とありますが、これはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 科学とは万能ではなく、およそこの世界の意味を解き明かすものではないということ。
- 2 科学とは西洋の学問が行きついた先であり、世界中を明るくするものだけだということ。
- 3 科学とはたくさんの人を殺す道具であり、神の世界に通じるものではないということ。
- 4 科学とは便利なものではあるが、それだけで人は幸福になれるわけではないということ。



問九 — 線部⑨「彼らの言葉をもう一度心に刻みたいと思うのです」とありますが、筆者はなぜこのようにしたいと思ったのですか。その説明として適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 ジェイムズやウェーバー、漱石といったすぐれた「知性」の持ち主が予見した人類の深刻な事態に、われわれは今、まさに直面していると考えたから。
- 2 東日本大震災や原発事故以来、明るい未来像を描けないままの日本人は、疑似宗教となりうる「二度生まれ」に可能性を見出すべきだと考えたから。
- 3 日本人は重大な問題でも時間が経つと忘れる傾向があるので、東日本大震災や原発事故の経験が無駄になってはいけなさと考えたから。
- 4 東日本大震災や原発事故のつらい経験ときちんと向き合うことで、新たな出発を遂げ、未来の可能性を信じることができると考えたから。

問十 この文章の内容のまとめとしてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 東日本大震災や原発事故について、科学は私たちに今まで身近ではなかった言葉や数値を正確に示すことでその危険性を伝えたが、それは私たちにとって必ずしもわかりやすく安心できるものではなかっただけに、今後はその隔絶感を取りはらうために、科学をもう一度生まれ変わらせて、人々の悩みを根本から解消できるようなものへとあらためてゆくべきである。
- 2 ジェイムズや漱石、ウェーバーといった人々は、生死の境をさまようほどの苦しみを経て、自分がそれまで信じてきた考え方や価値観を脱して新たな生き方や考え方を体得したのであったが、私たちもまた東日本大震災や原発事故を通して抱くようになった先々への不安と向き合うことでもう一度生まれ変わり、科学を過信してきたこれまでのあり方を反省するべきである。
- 3 第二次世界大戦直後の日本以上に、第一次世界大戦がヨーロッパにもたらした殺戮と破壊は情け容赦のないものであったため、ヴァレリーやウェーバーといった人々は科学に不信を抱き、やがては心を病むほどに苦しみながらもそれを乗り越える道を見出したわけで、私たちもそれにならって東日本大震災や原発事故によってもたらされた状況と向き合うべきである。
- 4 科学を宗教と同じように信じ、幸福をもたらしてくれるものだと考えてきた私たちは、もはやただ心のよすがとして科学を信じるばかりでは先に進めなくなっているが、東日本大震災や原発事故にみられる大きな被害や失敗を乗り越えて、これからは過去にとらわれることなく、もう一度幸福な日々に戻るための努力をするべきである。

次の文章を読んで、——線部1・2のどちらかを選び、それを手がかりとして感じたこと、考えたことを、一〇〇字以上二〇〇字以内で記しなさい(句読点、記号も含みます)。なお解答用紙の指定した欄に、手がかりとして選んだ——線部の番号を正しく記入しなさい。

【注意】採点の際には、表記や、どちらの——線部を選んだかについても考慮します。

睡眠である。

眠ってからしばらくすると、レム(REM)睡眠というものが始まる。マブタがピクピクする。このレムの間に、頭はその日のうちにあったことを整理している。記憶しておくべきこと、すなわち、倉庫に入れるべきものと、処分してしまったよきもの、忘れるものとの区分けが行なわれる。自然忘却である。

朝目をさまして、気分爽快であるのは、夜の間に、頭の中がきれいに整理されて、広々としているからである。何かの事情で、それが妨げられると、寝ざめが悪く、頭が重い。

朝の時間が、思考にとって黄金の時間であるのも、頭の工場の中がよく整頓されて、動きやすくなっているからにほかならない。

昔の人は、自然に従った生活をしてきたから、神の与え給うた忘却作用である睡眠だけで、充分、頭の掃除ができた。ところが、いまの人間は、情報過多といわれる社会に生きている。どうしても不必要なものが、頭にたまりやすい。夜のレム睡眠くらいでは、処理できないものが残る。これをそのままにしておけば、だんだん頭の中が混乱し、常時「忙しい」状態になる。ノイローゼなども、そういう原因から起る。

かつては、忘れてはいけない、忘れてはいけない、と言っていられた。倉庫として頭を使った。中が広々としていたからである。このごろは入れるものが多くなったのに、スペースには限りがある。その上、倉庫だけではなく工場としてもを創り出さなくてはならない。場ふさがりごろしているのは不都合である。

忘れる努力が求められるようになる。

これまで、多くの人はこんなことは考えたこともないから、さあ、忘れてみよ、と言われても、さつさと忘れられるわけがない。しかし、入るものがあれば、出るものがなくてはならない。入れるだけで、出さなくては、爆発してしまう。

食べものを食べる。消化して吸収すべきものを吸収したら、そののこりは体外へ排泄する。食べるだけで、排泄しなければ、糞つまりである。これまでの、倉庫式教育は、うっかりしていると、この糞つまりをつくりかねなかった。どんどん損取したら、どんどん排泄しないとけない。忘却はこの不可欠な排泄に当る。目のかたきにするのは大きな誤りである。

勉強し、知識を習得する一方で、不要になったものを、処分し、整理する必要がある。何が大切で、何がそうでないか。これがわからないと、古新聞一枚だって、整理できないが、いちいちそれを考えているひまはない。自然のうちに、直観的に、あとあと必要そうなものと、不要らしいものを区分けして、新陳代謝をしている。

頭をよく働かせるには、この「忘れる」ことが、きわめて大切である。頭を高効率の工場にするためにも、どうしてもたえず忘れて行く必要がある。

忘れるのは、価値観にもとづいて忘れる。おもしろいと思っっていることは、些細なことでもめったに忘れない。価値観がしっかりしていないと、大切なものを忘れ、つまらないものを覚えておくことになる。これについては、さらに考えなくてはならない。

(外山滋比古「思考の整理学」による)

四

次の——線部①～⑧のカタカナの部分に漢字で、⑨・⑩の漢字の部分にひらがなで書きなさい。いずれも一画一画をていねいに書くこと。

首相は直ちにソカクに入った。

書類をユウソウする。

カンケツな説明を心がける。

オウライに出てタクシーをひろう。

その作家のキヨウリを訪ねる。

その試合に勝ってユウシユウの美を飾った。

リンキ応変に対処する。

彼の作品は絶賛をハクした。

熱が出て発汗した。

少年は笑みを浮かべた。

(以下余白)

